館報
教育記念館
No.105
令和７年11月 発行

第22回 子どもの目、自然不思議発見写真展

8月28日(木)～9月30日(火)

ヒマワリのはんこうき？（１年）

進め！巨大ウツボ雲（３年）

絶滅危惧種キーウィ発見！！（６年）

花だんの花火大会（６年）

エーイ、怒ったぞ！（４年）

ナスのピノキオ（２年）

ちょうちょのランチタイム（６年）

バランス上手（５年）

主な内容

◎恒例展「子どもの目、自然不思議発見写真展」…… 1
◎教育時評　富山県中学校長会　会長　水戸　英之 …… 2
◎第35回　郷土の先賢顕彰者紹介　瘧師　テイ …… 3
井口　文秀 …… 4
宮崎忠次郎 …… 5
◎企画展「郷土の先賢展『仕事をおこす！』～富山から社会を拓いた起業家たち～」
◎恒例展「富山県版造形教育作品展・秀作回顧展」
「さんすうワールド展」
「富山県教職員厚生会退職厚生部富山支部会員作品展」
◎展示等の予定…… 6

発行所／公益財団法人　富山県ひとづくり財団　富山県教育記念館　〒930-0018 富山市千歳町１－５－１
TEL(076)444－2000　FAX(076)444－2001　E-mail:toyama@t-hito.or.jp　https://www.t-hito.or.jp
（教育記念館会議室ご利用の場合　☎(076)433－2770）
発行人／富山県教育記念館　館長　廣瀬　敬一　　印刷所／いおざき印刷株式会社

人と生きる

富山県中学校長会
会　長　水戸　英之

最近、人生を振り返ることが時々ある。特に意識しているわけではないのに。還暦が近づいてきているせいなのだろうか。還暦は、干支（十干十二支）の周期が一巡りし、元に戻ることを意味する。こうした生きる周期の中で、人生を振り返るということが、自然に起きているのだとすれば、還暦という言葉の意味が妙に理解できる気がしている。（本当にそうなのだとすれば、干支の考え方がこの世に誕生した時代に、人はすでに生きるメカニズムを理解していたということか…）

還暦の話題はさておき、自分の人生を振り返る中で、私の過去は、いつの時代も周りに誰かがいた。いつも周りの誰かに支えられてきた。自分に力を貸してくれたとか、助言を与えてくれたとか、進むべき方向を示唆してくれたというものだけではなく、直接的な働きかけはなくても、その存在が心の支えになってくれたという場合も多くある。だから、今の自分がある。今もそうだ。多くの人に支えられている。過去の自分を支えてくれた多くの人たち、そして、今の自分を支えてくれている多くの人たち、すべての人たちに心から感謝している。

私は、とにかく人が好きだ。これまでも、自分なりに人とのつながりを大切にしてきたが、年々その思いが大きくなってきている。（周りは面倒な人だと感じているかもしれないが…）

世の中の変化に適切に対応することが求められ、ＡＩが社会生活に占める割合が高まる今、学校教育は大きく変わっていかなければならない。しかし、学校教育の中で、最も大切にしていかなければならないことは、ＡＩとの付き合い方でも、ＡＩ時代に対応できる技術力でもない。人としての自分の在り方を見つめること、人との関わりを考えることである。

今の立場になって、いろいろな人と関わる中で、自分なりに心掛けていることがある。

「まずは共感すること。励ましや指摘は今でなくてもいい。」

「肩書ではなく役割を意識すること。」

「ただ決裁するのではなく、起案（提案）の内容に共感する意識をもつこと。」

「限界、無理だと感じたら、視点、やり方を変えること。」

こうした自分なりの思いをもとに、仲間と一緒に改善し、仲間と一緒に挑戦し、仲間と一緒に失敗するようにしている。

また、私たちは仕事柄、よく「がんばれ」という言葉を口にしがちである。でも、人それぞれに能力も違えば、成果も違う。その姿や結果に対する見え方も人それぞれである。だから、「もっとがんばれ」ではなく、「もう１歩前に進んでみよう」という方が、人にやさしいのではと思う。

自分の人生を振り返るようになって初めて感じたことがある。それは、今歩いている人生の道を選んで本当によかったということである。「もし違う道を選んでいたら…」とか、「本当にこの道を進んでいいのだろうか」と考えたことはある。今、とても充実している。今の道を選んだことに満足している。この道を選んだ過去の自分を褒めたい。

これまで、全力で精一杯進んできたと思える。それは、自分の支えになってくれる人の存在があったから。

これから先の時代を彩る人たちには、どんなことがあっても、人とのつながりを大切にし、自分が選んだ道を全力で精一杯進んでいってほしい。生きていく中で、違う人生は経験できないのだから。

第35回　郷土の先賢顕彰者紹介

３階　郷土先賢室

婦人会で新しい風を吹かせたリーダー

瘧師（ぎゃくし）　テイ　（1904～2003）

瘧師テイ（旧姓　中久木テイ）は、明治37年（1904）東京都に生まれる。教育者の父の転勤で富山市に移住する。女学校を卒業した後、東京共立女子職業学校甲部師範学校（現共立女子大学）に進学し、教員の道を志す。大正14年（1925）、師範学校を卒業し、東京で家庭科の教員になる。大正15年（1926）４月８日、知人の紹介で、船員である瘧師重雄と出会い結婚。結婚後は、夫の仕事のため神戸に住み、小学校に教員として勤めながら二人の息子を育てる。昭和19年（1944）８月、激化する戦争による物資不足等から夫の実家がある鷹栖村（現砺波市鷹栖）に移住する。村は庄川と小矢部川にはさまれた扇状地で井戸水は豊富な地域である。しかし、井戸掘りには多額の費用がかかったため、近くの川や用水を飲料水に利用する家もあり、衛生面や安全面で課題があった。農家の女性たちが農作業や家事に朝早くから夜遅くまで働き続ける姿を見て、都会で共働きをしていたテイは農村での暮らしに驚きや疑問をもつようになる。

昭和22年（1947）、鷹栖村に新体制の婦人会ができる。翌年、しがらみや慣習にとらわれないテイが婦人会長に選ばれる。テイは県内に先駆けて新しく会則や「鷹栖婦人会会歌」をつくる。また、季節託児所を開き、小学校の給食を当番制にして提供するなど、母親たちが必要とすることを取り上げて、婦人会活動として行う。研修会では、テイは民主的な婦人会の在り方を語ったり、家庭科教員としての知識を生かし、農村の生活習慣や台所の改善の推進を図ったりした。昭和28年（1953）５月１日には、地域からの要望の多かった常設の鷹栖婦人会立鷹栖幼稚園（旧鷹栖保育所）を開き、テイが初代園長になる。婦人会立の幼稚園は十分な設備や給食がなかったが、テイのたゆまぬ情熱によって、婦人会の会員が協力して米や野菜を持ち寄り、幼稚園の給食を当番で作るなど地域を巻き込んだ活動が行われる。

昭和29年（1954）１月、東砺波郡に編入していた鷹栖村は合併問題に揺れることとなる。鷹栖村は現在の砺波市、南砺市、小矢部市に隣接しており、明治時代から行政区が西砺波郡、東砺波郡と変わった。行政の都合でその都度、旧来からの村内の区割りが変更されることで生じる行事や生活での不便さ、農村が商家のある地域と合併することに不満が高まり、村内で合併について意見がまとまらなかった。その対立から村長および全村会議員が任期を１年以上残して総辞職。選挙までわずか１か月足らずの中、婦人会活動や高等学校の教員もして、地域住民の信頼と尊敬を集めていたテイに、地区内の村人たちが立候補を依頼する。そして、女性の参政権が認められてから３回目の村議会議員選挙で、唯一の女性候補であったテイが当選する。テイの尽力もあり、保育所の存続などの合併の条件を整え、昭和30年（1955）、鷹栖村は砺波市へ合併する。

後に砺波市教育委員・委員長や富山地方裁判所調停委員等を歴任する。婦人会長、教員、園長、議員と肩書は次々と変わったが、どの立場でも苦労や困難にも挫けず、自分だけでなく、周りの人のために活動した。健康維持のために、食生活や歩くことにこだわり、平成15年（2003）４月に98歳という、その長い人生に幕をおろした。

＜専門員　星野　貴昭＞

鷹栖婦人会会歌
作詞　宮本康政
作曲　吉田為子

砺波野の土ぞ香ぐわし
まどかなる村　空にみてる光
森かげに　ただよう夢
なでしこの群　女の集い

鍬（くわ）をとり、炊（かし）ぐ手もちて
慈しみ　秘（ひと）めし眸もちて
幸せを　豊さを　ここに奏でん

鷹栖に果（ゆう）ごもる夕
鷹栖を果立（あした）つ朝も
やさしく　強く　つつましく
希望を胸に　心協（あわ）せん

婦人会会歌（S25.11制定）

鷹栖婦人会立
鷹栖幼稚園
開園式（S28.5.1）
向かって右の柱の右
スーツ姿の初代園長
テイ

生きるものと対峙し、その尊さを真摯に描き続けた童画家

井口　文秀（1909~1992）

井口文秀は、明治42年（1909）７月１日、下新川郡大家庄村（現朝日町）に、僧侶の父文岱と母ぬいの三男として生まれる。天性の画才は幼いときから現れ、小学生時代から、「美小路」という雅号で絵を描き、友人と絵・詩・歌・童話等を持ち寄って同人誌を作る。そして、高等小学校在学中に出会った西田彦衛先生のあたたかい指導を受け、絵の道に入ることを決意する。

昭和３年（1928）、19歳で、栄照山了見寺住職であった兄を頼って上京。兄の寺の寺役を務めながら、太平洋美術学校（旧太平洋画会研究所）で３年間、洋画の基礎を学ぶ。その後、児童図書の出版社から挿絵を依頼されたことがきっかけで、児童図書専門の挿絵童画家として歩み出すことになる。

戦時下で描かれた「軍用犬」は文秀が初めて手掛けた絵物語であるが、昭和20年（1945）、出版される前日に東京大空襲で倉庫もろとも焼失し、出版されずに終わる。同年、文秀は横須賀海兵団に入隊するが、間もなく終戦を迎える。戦後、文秀は挿絵の仕事を再開。多くの出版社の発行する絵本の原画を引き受け、その後、小学校や中学校の国語、音楽等の教科書の挿絵も手掛ける。「大造じいさんとガン」や「スーホーの白い馬」等、多くの人々が文秀の絵に出合っている。

子供向けの絵本や雑誌、教科書などの挿絵は、大正時代から子供を理想的な存在として描かれていた。しかし、昭和40年代に童画に大きな変革が訪れ、対象をあるがままに捉える絵作りが始まる。文秀も現物を見ること、現地の空気を肌で感じることを何より大切にして、精力的に制作を手掛ける。

昭和43年（1968）、児童文学者の松谷みよ子と共に故郷の朝日町を訪れ、「むささびのコロ」や「センナじいとくま」を制作する。以降、あるがままの現実の精粋に迫る独自のリアリズム表現の童画を描き始める。経済成長期には、サギが農薬で浮いた魚を食べて苦しみながら舞い、地上に落ちていくという悲しい現状を知り、たとえようもない憤りをもって、「しろいさぎしろいわた」と「しらさぎとあきひこ」を制作する。文秀は、かねてより野生動物と人間の関わりに深い興味を寄せていたが、自然破壊が深刻になりつつある社会を憂い、子供たちが未来に希望をもてる絵本にしたいと強く願うようになる。

昭和45年（1970）、単身で大白鳥のルーツを求めてシベリアの奥地へ向かう。この取材を通して作成されたのが、富山市栃谷の大沢池に飛来してきた白鳥と村人、子供たちとの愛の交流を描いた「コーリャよはばたけ」である。芸術性の高い、自身初の創作絵本の誕生であった。「人間と自然の調和した世界」を絵本によって描くことを追求し、「くろべのツンコぎつね」「ライチョウは生きる」等の作品の中には、文秀のふるさとへの思いが込められている。文秀の繊細にして深みのある画風は、欧米各国の人々にも認められ、27作品が出版された。

「本物を見ずして絵を描くことは、子どもに失礼だ」と現物を見ること、現地の空気を肌で感じることを絶対としていたという文秀が制作した絵本には、生きるものすべてに限りなく優しいまなざしを注ぐ人柄がにじみ出ている。平成４年（1992）に急逝。文秀のメッセージは、子供だけでなく現代に生きる人々にも多くのことを語りかけている。

＜専門員　飛騨　英樹＞

白鳥の取材（S52）
井口文秀「童画の世界」
（朝日町立ふるさと美術館）

コーリャよはばたけ
（井口文秀　画／文　童心社）

農政制度の改善を望んだ、ばんどり騒動の象徴的存在

宮崎（みやざき）　忠次郎（ちゅうじろう）　（1832~1871）

宮崎忠次郎は、天保３年（1832）、塚越村（現立山町塚越）の中でも裕福な家で生まれる。学者肌の初代忠次郎の影響を受け、博識で進取の気風に富んでいたと言われる。安政５年（1858）４月、マグニチュード7.1（推定値）の地震が起こり、立山カルデラの大鳶山・小鳶山が崩れる。うずめられた渓谷から大量の土砂が常願寺川に流れ込み、流域の平野は泥の海となる。以降洪水が頻発するようになり農民たちは復興に尽力するが、苦しい生活が続く。一方、忠次郎は村を出て、江戸・東北・蝦夷地を妻子と共に転々とし、財をなす。

慶応４年（1868）、母の死をきっかけに塚越村に戻る。戊辰戦争が起こり、新政府側に立った加賀・富山藩は、旧幕府側の長岡藩に出兵するための各種軍需物資の調達を担い、その負担が重くのしかかる。この年は不作で、農民は年貢を納めた時にはもう食用の米に事欠く有り様だった。

翌明治２年（1869）は冷夏に見舞われる。特に新川郡ではいもち病が大発生し、例年の２割から３割程度の収穫の大凶作により、農民はますます困窮する。明治維新の直後の混乱の中、凶作に対する適切な対策をせず、例年通り年貢を取り立てようとする役人の態度に農民は不満を募らせる。同年10月17日、白岩川周辺の農民は水橋へ年貢を納めた帰り、竹内天神堂（現舟橋村）周辺に集まる。居合わせた忠次郎は、「いたずらに騒ぐのは愚かなことで、心をひとつにした行動を取るべき」と人々に説く。同月22日、農民が300名ほど国重（現舟橋村）に集まり、忠次郎を頼って呼び出す。解決策がまとまらず暴動になりそうになったため、忠次郎は「村役人には農民から信頼される者を選ぶこと」等を農民に提案。同月23日、交渉の引受人となった忠次郎は村役人に要求したが、取り合ってもらえず、金沢藩庁に訴え出ることを決心する。しかし、夕方、村役人に自分たちの要求が無視されたことを知った農民が、忠次郎の制止を聞かず、白岩川周辺の村役人の屋敷を襲い始める。騒動は続き、同月25日、駆けつけた藩の役人に忠次郎が改めて減免請願と農政制度の改善要求の嘆願書を提出。同月29日に無量寺（現舟橋村）で藩の役人から返答を受ける約束を取り付ける。

来る29日、1500名程の農民が無量寺で藩の役人からの返答を待ったが、藩の役人は現れず農民の怒りが頂点に達する。農民の怒りを抑えることができなくなった忠次郎は、一揆の総大将になることを決意し、「罪は自分一人が引き受け、誰一人として役人に引き渡さない」と宣言。農民たちは東に進み、行く先々で地域の農民が加わり、２万名程に膨れ上がった農民たちは多くの豪農や村役人の家を襲い、新川郡全体は騒乱状態になる。農民はばんどり（蓑）を身にまとい、竹槍等を手に加わったためこの一揆をばんどり騒動と言う。同年11月２日、忠次郎は泊の小沢屋に滞在中、刺客に襲われ、ほおに傷を負う。藩兵の本格的な攻撃で一揆の農民は混乱し、翌日には逃げ出す農民が増え、忠次郎は青木村東狐（現入善町）にて捕らえられる。この後、当時の村役人らが更迭され、新任の役人らの懸命な努力で困窮人救済の策が採られ、次第に村々は落ち着き始める。一方、明治３年（1870）７月、金沢藩庁で本格的に忠次郎の取り調べが始まり、明治４年（1871）10月27日、忠次郎は責任をとらされ斬首となる。39歳だった。忠次郎のおかげで農民たちは助けられたと記念碑を建て、その功績に感謝し続けている。

＜専門員　松井　功一＞

明治2年10月25日、忠次郎が役人に渡した嘆願書の大意
（「去巳年新川郡暴挙一件御詮議方留」より　利田小学校蔵）

ばんどりを着用して蜂起する農民
（想像図　無量寺蔵）

ばんどり：蓑（みの）のこと
藁（わら）で編んだ雨具
（舟橋村役場蔵）

企画展 「郷土の先賢展『仕事をおこす！』～富山から社会を拓いた起業家たち～」

4月17日(木)～6月30日(月)

企画展で紹介した起業家たち

県内には、ゆかりの地や記念館等があります。ぜひお立ち寄りください。

青井忠治	浅野総一郎	今村善次郎	大谷米太郎	大矢四郎兵衛	金岡幸二
金岡又左衛門	川原田政太郎	黒田善太郎	佐伯宗義	佐藤助九郎	2代目清水喜助
正力松太郎	瀬木博尚	高峰譲吉	竹平政太郎	安田善次郎	吉田忠雄

(五十音順に掲載)

富山県版造形教育作品展・秀作回顧展

7月4日(金)～8月19日(火)

こんな楽しい所があったとは知りませんでした。２階、３階の展示もよかったです。もっと多くの人に知ってほしいです。今度は家族とも来たいと思います。(アンケート 50代より)

さんすうワールド展

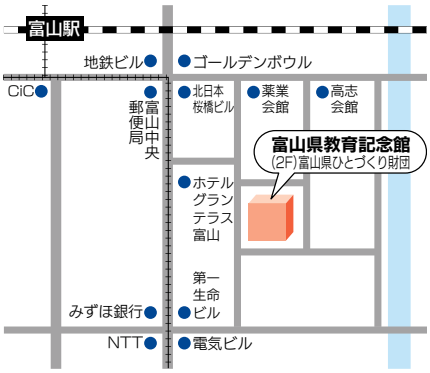
7月9日(水)～9月30日(火)

退職厚生部富山支部会員作品展

10月5日(日)～10月11日(土)

これからの展示等の予定

- 児童・生徒によるものづくり展　10月17日（金）～ 11月９日（日）
- 富山県造形教育作品展　11月15日（土）～ 11月30日（日）
- アイデアロボット展　12月６日（土）～ １月11日（日）
  - アイデアロボット展 関連企画　小学生ロボットづくり教室　１月11日（日）
- 富山県中学校美術展　１月16日（金）～ ２月８日（日）



公式X(旧Twitter)

https://x.com/t_hitozukuri

財団の取組みや富山県教育記念館の展示情報を掲載しています。ぜひ、フォローをお願いします。

教育記念館HP

https://www.t-hito.or.jp/

随時更新しています。

あ・と・が・き

「企画展は非常に面白かった。何もない富山と言われるが、すごい人がたくさんいたことがわかり、富山に誇りがもてた。『富山は人が素晴らしい』で売り込みましょう!!（アンケート40代より)」

ご協力を頂きました方々、観覧してくださった方々に感謝申し上げます。郷土先賢室では、新しい顕彰展が始まります。どうぞ足をお運び下さい。